

知ってますか  
技術の

あれ  
これ

5

## ハンス少年の腕 オランダを救ったひと (1)



三浦 基弘  
MIURA Motohiro  
大東文化大学講師

### 盛り上がったワールドカップ

サッカー。今年は2010年、4年に一度のワールドカップ。決勝は欧州同士の戦いで、オランダとスペイン。どちらも勝てば初優勝。両者が拮抗し、スペインに軍配があがった。日本はオランダと一緒に予選グループ。予選で、オランダに続き2位で決勝トーナメントに駒を進めた。残念ながらパラグアイに惜敗したが、日本国民の多くは、初めてのベスト16に進出したことに満足しているように思えた。

開催国の南アフリカに行く前、日本チームは韓国、イングランド、コートジボワールとの練習試合で1勝もできず、岡田監督の解任騒ぎ。しかし、本番の初戦カメルーンに勝ち、そしてデンマークにも勝ち、日本国民の歓喜のボルテージがあがり、いままで岡田監督に冷たい視線だったのが、エールを送る変わりようだった。

### 堤防を救った少年のはなし

オランダというと一般には風車とチューリップが思い浮かぶが、筆者は干拓と堤防に興味がある。筆者は二つのエピソードを思い出す。ひとつは筆者が高校時代の英語の教科書で読んだ「ハンス・プリンカー」の話。ある少年が堤防から水が漏れる穴を手でふさぎ、国を洪水から守ったという話である。高校時代に読んだ英文を再度見てみたいとK教科書編集部のTさんをお願いしたが、残念ながら保存していないとのこと。

手元にある『銀のスケート ハンス・プリンカーの物語』(M.M.ドッジ作 石井桃子訳 岩波少年文庫)で、おおまかな内容を紹介する。

「むかし、オランダの都会、ハールレムに、ひとりの気だてのいい、金髪少年が住んでいた。この子の父は、水門の番人であった。水門というのは、運河の入口に、一定の間隔をおいて設けられている、大きなカシの木の門で、この門によって、運河に流れ込む水の量を加減するのである。……この少年が8歳のころであった。ある天気の良い秋の午後、この子は両親のゆるしを得て、堤防のむこうがわの、町はずれに住んでいる、目の見えない人の家にお菓子を連れていくことになった。元気に家を出かけた少年は、喜ぶ年老いた友だちのところで1時間ばかり遊んだのち、わかれをつけ、家路についた。……運河のふちを歩いていくうち、見れば、秋の長雨で、運河の水が、ひどくふえている。……堤防を見上げると、上のほうに小さな穴があいていて、そこから少しずつ水が流れている。……」。

少年は、堤防によじ登り、小さな指をその穴に指を入れ、漏れる水を止めた。そして少年の気持ちを作者が代弁し、「……この長い、おそろしい見はりのしごとは、どれほど苦しかったであろう。家のあたたかいベッド、両親のこと、きょうだいのことを考えながら、目の前に寒い、さびしい、夜のくらやみを見つめるとき、少年の幼い心は、どんなに恐怖におそわれ、その決心は、どれほど、ゆるぎ、にぶったことだろう。けれど、もし自分がこの小さな指をぬいたら――